

第45回日本小児皮膚科学会 学術大会を開催して

(2021年7月3・4日)

※ハイブリッド開催

大矢 幸弘

国立成育医療研究センター アレルギーセンター センター長

はじめに

第45回日本小児皮膚科学会学術大会を、2021年7月3・4日の2日間、ウェスティンホテル東京にて、吉田和恵皮膚科診療部長を副会頭、福家辰樹総合アレルギー科医長を事務局長として開催させていただきました。このホテルは恵比寿ガーデンプレイスの一角にあり、女性会員にとっても男性会員にとっても、それぞれ参加意欲が高まりそうな施設が近接していることから、参加者増と参加者のQOL向上を念じて会場を選びました。

ところが、ご存じのように新型コロナウイルス(COVID-19)パンデミックの影響を受け、ハイブリッド開催を余儀なくされました。ただ、東京オリンピック開催直前の第5波襲来前だったことから現地には予想より多くの方にご来場いただくことができ、会場でも活発な議論を交わすことができました。Web参加の方や招待者も含めると約850名のご参加をいただき、充実した学術大会となりました。

テーマ

今回のテーマは「皮膚からはじめる子どもの健康」といたしました(図1)。私が専門とするアレルギー疾患は、アトピー性皮膚炎を起点としてアレルギーマーチが始まります。乳児期早期発症のアトピー性皮膚炎は食物アレルギー発症の最大のリスクファクターであり、とくに早期発症持続型は気管支喘息、アレルギー性鼻炎、数々の抗原感作のリスクファクターとなることがわかってきました。発症早期の徹底した治療でアトピー性皮膚炎の予後を改善すると



図1 本大会ポスター

ともに食物アレルギーの発症を予防し、アレルギーマーチを抑制できるかどうかに期待が集まっています。アレルギー以外でも、皮膚症状を呈する小児の疾患は多く、小児を診療する医師にとっては臨床力を試される場面にしばしば遭遇します。皮膚の診察を丁寧に行うことで子どもに対する診療能力を磨き、子どもの健康の増進につなげたいという思いをテーマにしました。

プログラム

特別講演は「感染症をめぐる最近の話題～COVID-19から耐性菌まで」(座長:東邦大学医学部皮膚科学講座・石河晃教授)を東邦大学医学部微生物・感染症学講座の舘田一博教授にお話いただきました。まさに渦中にある新型コロナウイルス感染症に関する最新の情報をお話いただくことが

でき、多数の質疑応答が展開されました。

教育講演は9つで、うち皮膚科領域講習が5つ、小児科領域講習が2つあり、シンポジウムは特別シンポジウム「臨床医が知っておくべき基礎研究の最前線」を含め9つ、うち、皮膚科領域講習が5つ、小児科領域講習が3つ、専門医共通講習が1つありました。そのほかに、共催シンポジウム3つ、ランチョンセミナー6つ、スイーツセミナー2つ、教育セミナー2つの特別プログラムを準備しました。ハイブリッド方式で会期後にオンデマンド配信を2週間行ったこともあり、どのプログラムも参加者は非常に多く、現地開催のみでは実現できなかったと思われる参加者数を稼いだプログラムもありました。中でも「応用行動分析学による子ども支援の可能性」(演者:奥田健次西軽井沢学園理事長)は発達障害児の劇的な行動変容に強いインパクトがありました。さらに、臨床研究の現場の事情や製品化前のデータを含め、アトピー性皮膚炎の予防や治療に関する最新情報がさまざまな角度から発表され、遺伝性疾患、感染症、皮膚のcommon diseaseなど疾患別・症候別のアプローチが多面的に展開されました。一般演題も多彩な分野が網羅され、貴重な症例報告が今回も多数発表されましたが、分子標的薬の治験のデータをはじめ、基礎的研究や臨床疫学研究の興味深いデータが発表されました。

会期1日目の7月3日は豪雨により熱海で土石流災害がおこり、大雨の影響で東海道新幹線が止まっ

てしまうというアクシデントがありました。そのため、東京への移動が不可能になった座長や演者の先生3名が急遽名古屋のホテルからWeb出演に切り替えるという機転で乗り切りました。このようなハイブリッド方式ならではのセーフティネットは、COVID-19パンデミック以前には実現できなかったことでした。

プログラム委員として企画を成功に導いていただきました石河晃先生、石黒精先生(国立成育医療研究センター教育研修部長)、佐伯秀久先生(日本医科大学皮膚科教授)、馬場直子先生(神奈川県立こども医療センター皮膚科部長)には、この場を借りて深謝申し上げます。

おわりに

懇親会は開くことができませんでしたが、会場やロビーでの議論はたいへん盛況で、やはり対面での情報交換の大切さを改めて実感しました。

また、「皮膚科と小児科が集うことで1+1=2ではなくて、3にも4にもなった学会であった」との嬉しい感想をいただきました。非会員の参加者数が会員をわずかに上回るなど、まだまだ本学会には発展の余地があることを実感しました。学会のさらなる発展を願いつつ、学術大会の運営にご協力いただいた方々とご参会いただいた皆様に心より御礼申し上げます(図2)。



図2 当施設の大会運営スタッフ(後半日)とともに